

光榮のオモチヤ

倉橋惣三

二

十月二十九日、東京女子高等師範学校の開校六十年記念式が擧げられ、畏くも皇后陛下の行啓を仰ぎました。その日の盛大な諸般の状況は、茲に一々記す暇がありませんが、幼稚園に關する部分だけを、書きとめました。しかもそれは、全體の中でも特に有り難い輝かしい記録なのであります。

御座所で拜謁を賜はつた時から、私の胸はもう一ぱいになつてゐました。式場では、それがわれ識らず込み上げて來て、國歌を合唱しようとする聲が出せないのです。令旨を賜はつた時の玉音のあのけ高かさ。涙なごいふ字を用ゐては畏れ多い。曇つて來る眼鏡を拭ひようもなく、玉音の裡にたゞ頭を垂れてゐました。令旨が終つて、校長の奉答辭の間であつたかと思ひます。やつこ仰いで玉姿を拜しようとした私の目は、すぐ前に直立の姿勢を執つてゐる小學校の一年生の子どもの手の微かに震へてゐるのを見ました。此の小さい兒童達も、畏さこ有り難さに、さつきから身をふるはせてゐたのでした。

○

陛下の御退場の後、私は陳列室の方へ急ぎました。

幼稚園の陳列室は、すつこ奥の第五室目です。朝日を一ぱいに受けてゐた時は少し強過ぎるかと思つた光線が、丁度いい具合の軟かさに茶の窓かけを透して部屋中に流れてゐました。その比較的廣々とした室の中に、入口左手の壁に沿ふ

て、間口二間程の「人形のお家」ミ、間口七尺餘の「オモチャヤ」ミが建てゝあり、入口右手には、廊下側の窓を瀟洒な手作りの懸布で覆ふた前に、木で作つた大きな麒麟ミ虎ミ、それを作る材料ミ道具ミ、それから大きなボール紙の家ミ、それを作る材料ミ道具ミが置かれてあり、もう一つの壁の方には、「本園の歴史を語る始めの敷章」ミいふ題下に、古い史料が陳列してあるのです。

私は入口に近く一人立つて、陛下の御巡覽をお待ちしました。「人形のお家」では、小さい椅子に掛けた二人の縫ひぐるみ人形が、卓子を隔てゝ、ほんまうに靜かな聲で今日の喜びを話しあつてゐます。「オモチャヤ」では、店柱につるされてゐる國旗や紅提灯が、微動だもない空氣の中に、明るい賑かな色彩を漂はせてゐます。麒麟は木箱の胸から長い首を伸ばし、虎は釘樽の胸に愛嬌のある圓い顔を縮こめ、ボール紙のビルヂングは小さい建築技師の手で切り抜かれた一階二階の窓ミいふ窓を皆開いて、私と共に、陛下の御靴の音をお待ち申上げて居ます。私も式場ミはすっかり違つた心持ちになつて、幼稚園の幼児達が斯ういふ時にもつであらうような心持ちになつてお待ち申上げてゐました。少くも、此の室では、さうでなければならぬと、自分を氣輕くさせることにつこめました。

○
さうで、微かな蟲の聲らしいものが聞えてゐます。

こゝで一才幼稚園の幼児達のことを記して置きます。この日幼児達は式場には入りませんが、講堂の入口に近く並んで、お通りすがりを拜することになりました。その位置は講堂入口にお曲りになる前、長い外廊下をお運びになる御通路の真正面に當つてゐます。即ち、畏れ多い程長い間、陛下の玉歩を正面からお迎へ申上げる位置になつてゐます。しかも、幼児のこゝですから、御無禮のない限り、餘り堅くならず、平常のあざけなさのまゝでお迎へ申上げた方が、却つて

御心になふこゝであるまいか考へて、保姆諸君も豫め打ち合はせて置いたのでした。私は式場にあつてその場所に居りませんでした。後で保姆諸君から聞くところによります。陛下には長い廊下の向ふから、直ぐに此の小さいものゝ群をお見せになり、御にこやかに笑ませ給ひながら、玉歩をこちらに進ませられ、幼児達が最敬禮をいたした時には、暫く御立ち止りにさへなつて御會釋を給ひ、更に講堂入口の方へお曲りになつてからも、再び御にこやかに振りかへつて幼児達を御覽遊ばされ、畏くも玉顔の殊の外に御うるはしきを拜し奉つたさいふこゝであります。幼児達の心にも、保姆諸君の心にも、此の貴い有り難い御姿が、如何に深く印象づけられたこゝであります。實は、此の日保姆諸君が幼児と共に場外にあつて、晴れの式に列し得ないさいふこゝは、私にして可なりに心を惱ませてゐたこゝであつたのです。それが、斯くも御間近かに、殊に子ぎも達のために打ち笑ませ給ふをさへ仰ぎ拜し得たさいふこゝを後に聞いて、保姆諸君の心からなる喜びに、私もやつこゝ心を安んずるこゝが出来たのであります。

○
幼児達はそれから體操遊戯場の方へ集つて、小學校の低學年と共に「日の丸行進」を御覽に入れました。

話を陳列室へかへします。

陛下には、本校、高等女學校、小學校と、各室の陳列に御興味の深かつた爲、豫定の御時刻よりは少し遅れて、幼稚園の室に成らせられました。御先導の校長の命によつて、私から御説明を申し上げるようによこしたのですが、次の體操遊戯台覽の御時刻も迫つてゐましたし、私は差控へ差控へて、つぎめて多くを申し上げないように心しました。それでも、陛下は、いさも御感興深く此のあきけない幼児の世界に時を御過し遊ばされ、幼児の製作品にお手をさへ觸れさせられ、一愛らしげにみそなはせられますので、私もつい何彼も御説明申上げて、こゝでも豫めの心づもりの時間よりは、すつこ

御超過になりました。

「人形のお家」では、人形の顔(幼児の原圖)に御顔を寄せて御覽になりました。時計の五時と六時とが妙なところになつてゐるのもお目にこめられました。臺所になつてゐる方の食物箱に柿やさんぐりの實のあるのを御指さし遊ばされて、女官の方と打ち笑まされました。幼児の作つた青色の魚をさんまださうで御座いますと申上げましたら、お笑ひ遊ばされて御手づから同じ籠の中にある妙な形のを取り上げて御覽になつたりしました。

「オモチャヤ」は、「人形のお家」の現代式なのに對して、磨き丸太の店構へから紅木綿の暖簾まで、全體が江戸趣味の下世話風に出來てゐるのが、先づお目をひいたようにも拜しました。澤山に竝べてあるいろくくの玩具は、皆幼児が一ヶ月餘を重ねて作りためた製作ばかりです。そのあれこれにお手をつけられ、側の皿に紙の小錢なごもあつて、これから賣り買ひが始められようといふ仕組みにも、御興深げに御うなづき遊ばされました。私は此の保育原理になつてゐるプロヂエクト、メソッドに就て御説明申上げようかとも思ひましたが、そんな理窟はごこかへ消えて、唯にこくく溶けて居りました。そして、之れをお小さい宮さま方にお目にかけていような氣が致しますといふような言葉を、つい申上げて仕舞ひました。しかも、それと同じ瞬間です。校長からも皇后太夫や待從に、之れを宮様方に献上いたしてはと申出でられ、それはきつとお喜びになりませうといふやうなお話があり、その場で私にも傳へられたのでした。素より豫め期してゐないことです。陛下の御興味に甘え奉つたような突然の出來事です。私のその時の感激はごんなでありましたらう。それにしても、何んといふ光榮の「オモチャヤ」なのでありませう。

木の製作と紙の製作とは、昔の保育法と違つて、大きい手技、力の籠つた仕事といふところに要點があります。之れに就ては、史料として列べて置いた昔の幼稚園の維細な保育法と比較して、少し理論めいたことを申上げました。陛下は御

説明を御聴取遊ばされた後、御手を舉げて麒麟の首にお觸りになつたりしました。その首や顔には黄の繪具が粗つぽく塗つてあります。白革の御手袋……私はハッとしたことでありました。

古史料に就ては、御興味さいふよりも、精細にお目をさめられました。そこには明治九年開園當時の園舎の寫眞、當時の職員の写真、園舎内部の設計圖、當時の保育狀況の寫生圖、幼児の製作品、當時の保育書や保姆の手記類さいふ様な、従て苦心して蒐めてありました幼稚園教育史の資料の一部を列べて置きました。そんな研究的のものにも、斯くもお目をさめられましたことは、誠に有り難いことであります。

○

さて、光榮の「オモチャ」は、三十、三十一日の兩日陳列の室にあつて校内の觀覽に供せられた後、十一月一日、校長が皇后職の方々へ御挨拶に參られるのさいつしよに、私と及川保姆まで大自働車一ぱいに積み込んで持つて上りました。そして、消毒所で消毒して頂いた後、皇后職の人々の手を借りて組み立て、及川保姆が一つも通りに飾りつけました。それが組み立て上げられたのが四時をすぎ過ぎてゐましたし、私達は其の日はそれで退出致すことと思つて居りましたのに、直ぐそれが大勢の仕丁の手で大奥に運ばれました上、特に竹屋女官長を通じて、皇后陛下からの有り難いお言葉を賜はりました。私達が恐懼して、それにお答へ申上げましたお禮の言葉が、全園の幼児達の代表としてあつたことは申すまでもありません。阪下御門を出てから始めて我れに歸つたらしい及川保姆は、小雨にうるほふ夕闇の自働車の窓の中で、なんだか夢のようで御座いますと、獨り言のやうに言つてゐました。幼稚園へ歸りましたら、玄關も主事室も職員室も、電燈が煌々ともつてゐました。保姆諸君が、今日のお模様を聞かすには歸れないといつて、皆揃つて、待ち受けてゐたのでした。

ほんまうに光榮の「オモチャヤ」よ。お前はその後、御殿のきこで、ごんな光榮に浴してゐるのか。幼稚園から陳列室へ、陳列室から大奥へ……。急に思ひがけない出世をした「オモチャヤ」の、あの赤い紙獨樂が、派手な着物を著た切抜き人形が、黒く塗られた水兵帽が、金紙の貼られた劍が、糸に通してあるジュヅ玉が、千代紙の箱の中に入れられてある顔入りの銀杏の實が、花笠が、風車が、ごごもの書いた「オモチャヤ」さいふ看板の下で、つゝましく、しかし相變らず少しおごけて、ごんな顔をして列んでゐるごごであらうか。私達は、お伽話の中のごごのような、ほゝ笑ましいイマジネーションに驅られずにゐられません。多分ごごにして同じごごだと思ひますが、私が御進講のために召されます時々漏れ承りますごごころでは、宮さま方も大層お喜び遊ばされ、お遊び道具になつてゐるごごかいふ趣きであります。ごごまで光榮の「オモチャヤ」。仕合はせものゝ「オモチャヤ」なのであります。

皇后陛下には、先般來倉橋惣三氏を召されまして、毎月曜日、兒童の教育に就ての連續の御進講を御聽取の趣に承つて居ります。

國母陛下として、御慈愛深き御母君として、斯の道に對する、いつもながらの御熱心なる思召には、誠に恐懼にたえません次第であります。

(編者)